

英語学習における動機づけと L2 理想自己、L2 義務自己の関係性 —中学生の事例研究—

日下部優奈

(京都教育大学大学院連合教職実践研究科 大学院生)

Relationship Between Student's Motivation and Ideal L2 Self, Ought-to L2 Self for English Learning —A Case Study of Junior High School Students—

Yuna KUSAKABE

2024 年 9 月 30 日受理

抄録: 2019 年以降、4 技能・5 領域をより意識した英語教育が実施されるようになり、学力の向上が成果として挙げられている。しかし、その一方で、生徒たちの英語学習に対するモチベーションは低下傾向にあることも指摘されている。本研究は、中学生段階における英語に関する自己イメージとモチベーションの関連を明らかにすることを目的とした量的研究である。研究の目的を達成するため、中学校第 1 学年から第 3 学年までの生徒 261 名にアンケートを行い、SPSS を用いて分析を行った。その結果、中学生の英語教育では、自己を高めることは学習に対するモチベーションの向上や授業の積極的な参加に効果的であることが示された。特に、内発的動機づけは理想自己と正の相関があったことから、理想自己を形成することが重要であることがわかった。一方、外発的動機づけは義務自己に結びついていることが明らかになったが、外発的動機づけが高い生徒と授業への積極的な参加に関する関連性は見られなかった。また、心理的欲求は内発的動機づけに関連していたため、有能性の欲求、関係性の欲求、自律性の欲求を高められる活動は内発的動機づけに効果があることがわかった。以上のことから、中学生の英語学習において、内発的動機づけと理想自己、外発的動機づけと義務自己はそれぞれ関連していることが明らかとなった。理想自己の形成は、その後の英語学習の継続や授業への積極性において効果があるといえるだろう。

キーワード: 動機づけ, L2 自己システム, 自己決定理論, 中学生

I. はじめに

文部科学省 (MEXT) は 2019 年の改定以降、グローバル社会の発展に伴いさらなる英語力の向上を目標としている。それによって、英語教育ではこれまで以上に 4 技能 5 領域 (「話すこと (やり取り)」、「話すこと (発表)」、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」) のバランスが重要視されることとなり、「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標や ICT 機器の利用など様々なアプローチを行ってきた。その結果、令和 4 年度の文部科学省によって実施された英語教育実施状況調査では、中学校高校共に CEFR のレベルから英語力が年々向上している傾向があることが発表された。しかし、令和 5 年度に文部科学省で行われた全国学力・学習状況調査の結果によると、英語の勉強が好きではない学習者の数は小学生より中学生の方が多く、この結果から学年が上がるにつれて英語に対する学習意欲は低下する傾向が課題となっていることがわかる (文部科学省, 2023)。また、多くの企業が英語のスキルを重視しており社会人のコミュニケーションツールとして英語力は欠かせないものになっているにもかかわらず、将来の英語学習への意欲は低迷している。新型コロナウイルスの影響もあり、将来の自己イメージの持ちにくさは以前よりも悪化しているだろう。英語学習におけるモチベーションと自己意識は研

究されるべき1つの課題であると考えられる。

Ⅱ. 先行研究

1. 動機づけ

動機づけとは目的や目標などの要因によって行動を起こし、それを達成するまで保持・持続させる心理的な過程であり、内発的動機づけと外発的動機づけに分類される。自己決定理論とは、内発的動機づけを促進する社会的・環境的要因と反対に低下させるこれらの要因に影響するという点で関係している (Ryan&Deci, 2000a)。

Ryan&Deci (2002) によると、内発的動機づけとはある活動から操作的に分離可能な偶発性や強化ではなく、行動自体に内在する満足に基づく動機づけである。一方、deCharms(1968)によると、外発的動機づけはある行動の始まりと調節が自分の外部にあると認識する点で、それらが内部にあると認識する内発的動機づけと区別される。しかし、外的要因があるはずの因子の中には時間が経過するにつれて内面化され、個人のアイデンティティの一部となって自己の感覚に移行するものもある (Ryan&Deci, 2000b)。

2. L2自己システム

L2自己システムとはDörnyeiが提唱した概念であり、理想自己と義務自己、L2学習経験が含まれる (Dörnyei 2010; Dörnyei & Ushioda 2009)。

- ・L2理想自己: 「理想的な自己像」のL2特有の側面である。なりたい自分がL2を話すなら、L2を学ぶ強い動機づけとなる。

- ・L2義務自己: 期待に応え、起こりうる否定的な結果を避けるために、自分が持つべきであると考ええる。

- ・L2学習経験: 目の前の学習環境や経験に関連する状況的動機に関係する。

また、Dörnyei and Chan(2013)によると、理想自己はできるだけ明確なものでなければならず、学習者の努力や達成度の向上に貢献することができるとされているため、授業において理想自己の形成を促していくことができるよう考えていく必要がある。

Markus and Nurius(1986)の研究によると、将来の成功イメージのような可能自己と動機づけは関連していることが明らかとされ、Higgins(1987)が提唱した自己不一致理論では、理想自己と現実自己とのギャップから不安や絶望などのネガティブな感情が生じてしまい、その矛盾が大きいほどそれらの不快感も大きくなるためギャップを埋める必要があるとされている。

3. エンゲージメント

エンゲージメントとは、「学習課題に没頭して取り組んでいる心理状態」を指し、主に4つの要素に分けられ、相互作用する (Christenson et al., 2012)。

- ・行動的エンゲージメント: 特定の具体的な学習場面や学習課題におけるエンゲージメント。

- ・感情的エンゲージメント: 興味や熱意のようなタスクを促進する感情や、不安や恐怖のようなタスクを抑制する感情に関する概念。

- ・認知的エンゲージメント: 概念的な理解を求めるものであり、自己調整方略などに関する。

梅本(2016)によると、感情的エンゲージメントは直接学習の結果には作用せず、行動的エンゲージメントの促進において重要な役割を担っている。また、教師の指導支援や教室内の環境、人間関係などは学習者の行動的・感情的・認知的エンゲージメントに影響する (Reeve&Tseng, 2011)。

4. 自己決定理論

(1) 有機的統合理論

有機的統合理論とは、従来は対立する概念であると考えられてきた内発的動機づけと外発的動機づけを切り離

さずに考える理論である。学習者は外発的動機づけから外発的目標が自己承認される場合があり、内発的動機づけと外発的動機づけは同じ線上に存在する概念であるといえる (Ryan&Deci, 2000a)。

OIT (Organismic Integration Theory) 分類法は、内発的動機づけや外発的動機づけに関する行動の動機づけがどの程度生じているのかについて説明する (Ryan&Deci, 2002)。各構成要素は左から右に配置されるにつれて自律性が高くなっており、右側の 4 つ(左から順に外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整、統合的調整)は外発的動機づけに関する構成要素である。これらのうち、外的調整と取り入れは最も自律的でない形態を表し、活動目的を外的なものとするという特徴をもつ。最も右側に位置している概念は内発的動機づけであり、これは内向調節を構成要素として含む。また、外発的動機づけの右側に位置している構成要素である同一視的調整と統合的調整、そして内発的動機づけの構成要素である内的調整は自律的動機づけに含まれる (Ryan&Deci, 2000b)。従って、同一視的調整と統合的調整は外発的動機づけに位置しているが、自律性が高いため、自らの意志で活動することができる状態であるといえる。

(2) 基本的心理欲求理論

基本的心理欲求理論とは内発的動機づけ、心理的幸福、効果的な機能、質の高いエンゲージメントに対する欲求の本質的な役割を明らかにする理論である (Christenson, Reschly and Wylie, 2012)。また、Ryan&Deci (2002) によると、自律性、有能性、関係性という 3 つの心理的欲求が内発的動機づけに関係し、基本的な心理的欲求という概念は動機づけやパフォーマンス、そして幸福を支持したり弱めたりする文脈的要因を特定することにおいて役立つ。自律性とは、行動が自己から起こり、自身によって承認されたいという心理的欲求であり、有能性とは自己の追究と環境の相互作用に効果的である。また、関係性とは他者との密接で感情的な結びつきや安定した愛情の確立における本質的な欲求を意味する。

Ⅲ. 研究の目的

本研究の目的は、中学生英語学習者の L2 自己とエンゲージメント、そして動機づけの関係性を明らかにすることにある。本研究の目的を達成するために以下のリサーチクエスチョン (RQs) を設定した。

RQ1 : L2 理想自己、L2 義務自己、動機づけ、エンゲージメントはそれぞれ関係しているか。

RQ2 : 内発的動機づけと外発的動機づけは L2 理想自己、L2 義務自己、エンゲージメント、心理的欲求に影響するか。

Ⅳ. 研究の方法

1. 参加者

本研究の参加者は、大阪府 A 市にある公立中学校の第一学年から第三学年までの生徒 261 名 (第一学年 86 名、第二学年 78 名、第三学年 97 名) であった。英語の授業には少人数制やチームティーチングが導入されており、一人ひとりに焦点を当てた教育が行われている。また、ALT による授業も行われており、授業頻度は 2 ヶ月に 1 回程度である。

2. アンケートについて

調査は四件法 (とてもそう思う、そう思う、あまり思わない、まったく思わない) のアンケート形式で、Taguchi, Magid and Papi (2009) と染谷 (2018, 2022) の研究で用いられた尺度を参考にして項目を作成した。質問項目は、有機的統合理論 (Deci and Ryan, 1985) の観点から内的調整、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整に関する 12 項目、基本的心理的欲求理論 (MacClelland, 1976) からは自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求に関する 9 項目、エンゲージメントからは感情的エンゲージメント、行動的エンゲージメントと認知的エンゲージメントに関する 11 項目、L2 理想自己と L2 義務自己 (Dörnyei, 2005, 2009) に関する 6 項目の計 38 項目であった。学年は尋ねたが、倫理的配慮のため匿名で行った。使用したアンケートの枠組みを表 1 に示す。

表1 アンケートの枠組みと項目例

要因		項目の例	数
有機的統合理論	内的調整	英語に興味があるから	3
	同一視的調整	英語を使えるようになりたいから	3
	取入的調整	親や先生にほめてもらいたいから	3
	外的調整	授業を受けるのは決まりごとだから	3
心理的欲求充足	自律性	すすんで自分の意見や考えを自由に言えている	3
	有能性	自信をもって活動できる	3
	関係性	クラスの人と仲良く活動できている	3
エンゲージメント	感情	英語の授業では、楽しめている	3
	行動	英語の授業で、聞く活動に集中して取り組んでいる	4
	認知	英語の授業で、自分の伝えたいことを工夫して英語で表現しようとしている	4
L2 自己	L2 理想自己	将来の仕事について考えるとき、英語を使っている自分を想像する	3
	L2 義務自己	英語を勉強すると両親が喜ぶと思うので、勉強しようと思う	3

3. データ分析

アンケートはGoogle フォームで11月の始めに行い、その後エクセルにデータを打ち込んだ。そしてSPSS Ver 27を使ってそのデータを分析した。

各項目に関して信頼性係数(α 係数)を算出した。また、これらが各々の因子を適切に反映しているかを検討するために、いくつかの因子に確認的因子分析(CFA)を行った。その後、各因子の関連性を検討するために相関分析を行った。さらに、有機的統合理論の観点から、本分析において特に統制的動機づけと自律的動機づけに近いと考えられる因子に焦点を当て、それらの因子における平均値が高い生徒のグループが、どのように理想自己と義務自己に影響するのかを検討するため、クラスタ分析を行った。

V. 結果と考察

1. RQ1の検討結果

まず、RQ1に答えるために、クロンバックの α 係数、因子分析及び相関係数を算出した。各変数においてクロンバックの α 係数を用いて信頼性係数を計算した結果、「内的調整($\alpha = .899$)」、「同一視的調整($\alpha = .829$)」、「取り入的調整($\alpha = .818$)」、「外的調整($\alpha = .618$)」、「自律性の欲求($\alpha = .740$)」、「有能性の欲求($\alpha = .671$)」、「関係性の欲求($\alpha = .754$)」、「感情的エンゲージメント($\alpha = .859$)」、「行動的エンゲージメント($\alpha = .894$)」、「認知的エンゲージメント($\alpha = .897$)」、「L2理想自己($\alpha = .817$)」、「L2義務自己($\alpha = .790$)」で、十分な値が得られた。外的調整の因子における信頼性係数が好ましくないため、因子分析を行なったところ、構成因子のうち1つ目の項目の因子量が小さいことが分かったため、その項目を取り除き残りの2つの項目で再び因子分析を行い、 $\alpha = .753$ で十分な信頼性を確認することができた。

相関分析の結果、L2理想自己とL2義務自己のどちらも、動機づけやエンゲージメントに関する全ての因子と相関があることがわかった。また、L2理想自己は内発的動機づけに関する因子である内的調整、自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求と有意な正の相関関係を示し($r = .590, .484, .664, .334, p < .01$)、L2義務自己は

外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整のような外発的動機づけに関する因子に対して正の相関を示した ($r=.153, .500, .304, p<.01$)。内的調整に着目して見ると、外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整の順番で相関が強くなっており、これは有機的統合理論の考え方と一致している ($r=-0.115, .411, .651, p<.01$) (表 2)。

表 2 相関係数

因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 内的調整	—	0.651**	0.411**	-0.115	0.583**	0.655**	0.345**	0.726**	0.674**	0.610**	0.590**	0.284**
2. 同一視的調整		—	0.283**	-0.014	0.464**	0.540**	0.337**	0.516**	0.577**	0.552**	0.475**	0.304**
3. 取り入れ			—	0.117	0.243**	0.351**	0.293**	0.344**	0.362**	0.307**	0.352**	0.500**
4. 外的調整				—	-0.079	-0.107	0.001	-0.090	-0.007	0.043	-0.165**	0.153*
5. 自律性の欲求					—	0.723**	0.451**	0.525**	0.670**	0.648**	0.484**	0.201**
6. 有能性の欲求						—	0.564**	0.645**	0.733**	0.676**	0.664**	0.261**
7. 関係性の欲求							—	0.515**	0.539**	0.551**	0.334**	0.189**
8. 感情的エンゲージメント								—	0.681**	0.618**	0.514**	0.288**
9. 行動的エンゲージメント									—	0.868**	0.556**	0.313**
10. 認知的エンゲージメント										—	0.459**	0.289**
11. L2 理想自己											—	0.390**
12. L2 義務自己												—

* $p<.05$. ** $p<.01$.

2. RQ2の検討結果

次に、RQ2に答えるために、有機的統合理論の観点から内発的動機づけが高い集団と外発的動機づけが高い集団に分けるクラスタ分析を行った。有機的統合理論の観点から、取り入れの調整と外的調整の2つの因子を外発的動機づけの因子、内的調整を内発的動機づけの因子とし、2つのクラスタを得た。以下ではそれぞれのクラスタを平均値で比較した結果を示す。

内発的動機づけに基づいてクラスタ分析を行い、内発動機づけが高い集団（第1クラスタ）と低い集団（第2クラスタ）に分けた。まず、L2理想自己とL2義務自己の平均値を比較したところ、どちらも第1クラスタの方が第2クラスタより平均値が高いことが分かった（図1）。また、分散分析の結果、どちらも有意であった（理想自己： $F=37.61$, $p<.001$, 義務自己： $F=10.45$, $p=.001$ ）。したがって、内発的動機づけが高い生徒はL2理想自己、L2義務自己どちらも高いといえる。次に、エンゲージメントにおいて分散分析を行なった結果、全て有意であった（感情的エンゲージメント： $F=50.21$, 行動的エンゲージメント： $F=47.13$, 認知的エンゲージメント： $F=41.34$, とともに $p<.001$ ）。感情的エンゲージメント、行動的エンゲージメント、認知的エンゲージメントの平均値を比較すると、第1クラスタの方が第2クラスタより得点が高いことが分かった（図2）。したがって、内発的動機づけが高い生徒はエンゲージメントの得点が高いことがわかった。心理的欲求において分散分析を行った結果、どの因子も有意だった（自律性の欲求： $F=51.26$, $p<.001$, 有能性の欲求： $F=44.69$, $p<.001$, 関係性の欲求： $F=10.56$, $p=.001$ ）。また、第1クラスタの方がどの欲求の平均値も高いことがわかった（図3）。したがって、内発的動機づけが高い生徒集団は心理的欲求も強いといえる。

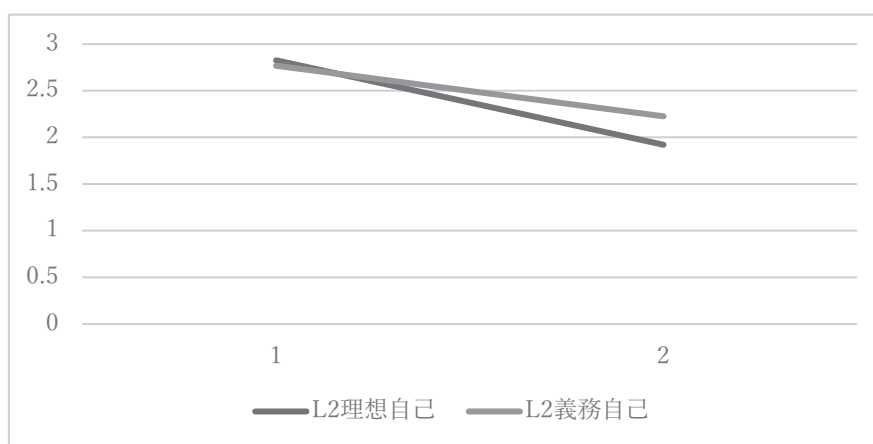


図1 内発的動機づけに基づくセルフの比較

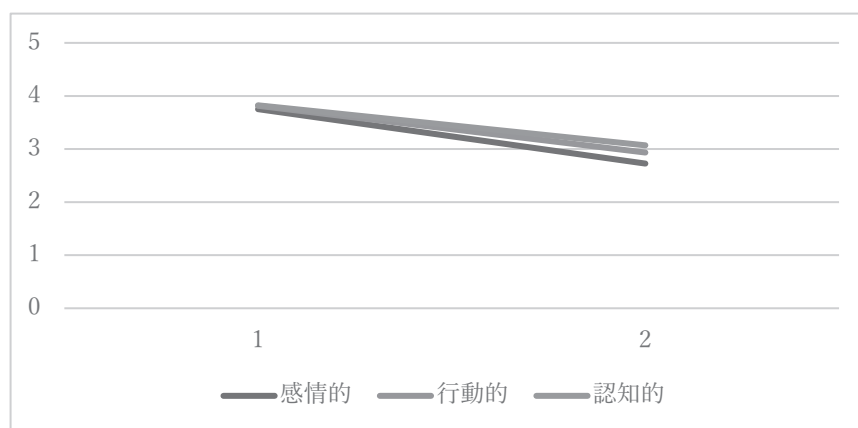


図2 内発的動機づけに基づくエンゲージメントの比較

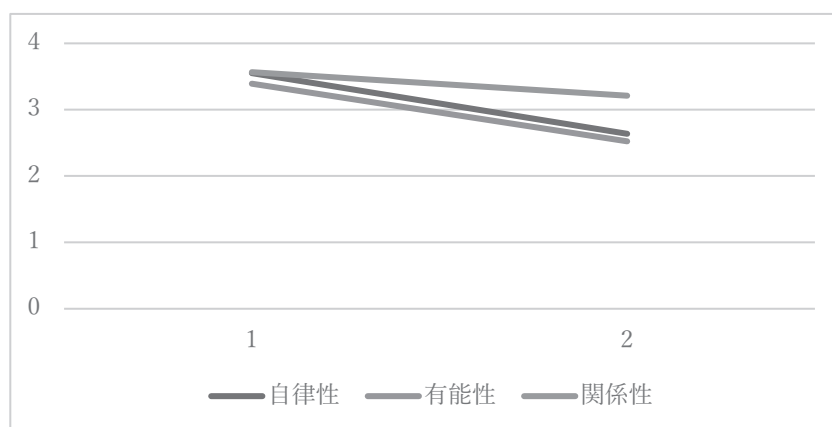


図3 内発的動機づけに基づく心理的欲求の比較

一方、外発的動機づけに基づいてクラスタを分類したところ、外発的動機づけが高い集団（第1クラスタ）と低い集団（第2クラスタ）に分けられた。まず、L2理想自己とL2義務自己において分散分析を行なった結果、前者は有意ではないが($F=3.44$, $p=.065$)、後者は有意だった($F=13.25$, $p<.001$)。そして、第1クラスタの方がよりL2義務自己の得点が高いことが分かったことから、外発的動機づけが高い生徒はL2義務自己の平均値が高いといえる(図4)。次に、エンゲージメントにおいて分散分析を行った結果、どの因子も有意とはいえなかった(感情的エンゲージメント: $F=.080$, $p=.778$, 行動的エンゲージメント: $F=.645$, $p=.423$, 認知的エンゲージメント: $F=1.17$, $p=.281$)。最後に、心理的欲求において分散分析を行なった結果、どの因子も有意とはいえなかった(自律性の欲求: $F=.738$, $p=.391$, 有能性の欲求: $F=.128$, $p=.721$, 関係性の欲求: $F=.629$, $p=.428$)。

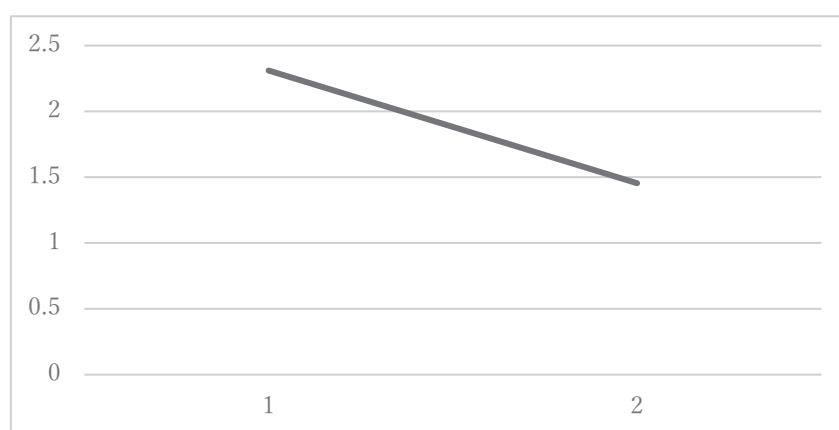


図4 外発的動機づけに基づく L2 義務自己の比較

VI. 教育的示唆と今後の課題

本研究においてL2理想自己、L2義務自己と動機づけの関係性について考察した結果、L2自己を確立できている生徒は少なかったため、L2自己の確立に関してより焦点を当てる必要性が示唆された。また、中学生時点

での自己と動機づけの関係はほとんど差がなかったが、高校生や大学生など、より幅広い年齢の学習者を調査すれば、何らかの違いが観察される可能性がある。

今後の外国語学習では、学習者の L2 理想自己、L2 義務自己が大きな課題となる。また、どのような学習活動が理想的な L2 理想自己、L2 義務自己の確立を支援するかについて検討する必要があるとともに、自己の確立を促し、内発的動機づけを高める授業を実施することが求められる。

謝辞

この論文の作成にあたって、私は多くの方々にご指導ご協力をいただきました。まずは、忙しい中たくさんのサポートや指導をしてくださった染谷藤重先生に感謝の意を表したいと思います。また、この研究に使用したアンケートを実施してくださった中学校の先生方と生徒たちの協力に感謝を申し上げます。

参考文献

- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000a). Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions and New Directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.
- Dörnyei, Z., & Chan, L. (2013). Motivation and Vision: An Analysis of Future L2 Ideal L2 self, ought-to L2 selves, Sensory Styles, and Imagery Capacity Across Two Target Languages. *Language Learning*, 63, 437-462
- Ushioda, E., & Dörnyei, Z. (2009). Motivation, Language Identities and the L2 Self: A Theoretical Overview. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 1-8). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research* (pp. 3-33). Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Dörnyei, Z. (2010). Researching motivation: From integrativeness to the ideal L2 self. In S. Hunston & D. Oakey (Eds.), *Introducing applied linguistics: Concepts and skills* (pp. 74-83). London: Routledge/Taylor & Francis.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000b). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55(1), 68-78. doi: 10.1037/0003-066X.55.1.68
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340. 10.1037/0033-295X.94.3.319
- Taguchi, T., M. Maid & M. Papi (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (eds.), 66-97.
- 梅本貴豊, 伊藤崇達、田中健史郎(2016). 「調整方略、感情のおよび行動的エンゲージメント、学業成果の関連」『心理学研究』 87, 334-342.
- Christenson, S. L., Reschly, A. L., & Wylie, C. (Eds.). (2012). *Handbook of research on student*

engagement. Springer Science.

Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American psychologist*, 41(9), 954-966.

Ryan, R. M., Mims, V., & Koestner, R. (1983). Relation of reward contingency and interpersonal context on intrinsic motivation: A review and test using cognitive evaluation theory. *Journal of Personal and Social Psychology*, 45, 736-750.

Reeve, J., & Tseng, C.-M. (2011). Agency as a fourth aspect of students' engagement during learning activities. *Contemporary Educational Psychology*, 36(4), 257-267.

Plant, R., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and the effects of self-consciousness, self-awareness, and ego-involvement: An investigation of internally controlling styles. *Journal of Personality*, 53, 135-449.

Deci, E. I., & Ryan, R. M. (1980). The empirical exploration of intrinsic motivational processes. In I. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 13, pp.39-80. New York: Academic Press.

deCharms, R. (1968). *Personal causation*. New York: Academic Press.

Tanaka, H. (2010). 「英語の授業で内発的動機づけを高める研究」—『JACET Journal』, 50, 63-80.

染谷藤重. (2018). 「小学校高学年と中学生の動機づけの差異に関する調査研究-有機的統合理論に着目して-」『駒沢女子大学研究紀要』 25, 259-271.

染谷藤重(2022). 「英語教師の自律性支援がエンゲージメントに及ぼす影響- 中学校英語授業における心理的欲求を媒介として-」『京都教育大学研究紀要』 141, 81-91.

MEXT, 国立教育政策研究所 (2023). 全国学力・学習状況調査の結果

<https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/report/data/23summary.pdf>

MEXT, (2022). 令和4年度英語教育実施状況調査の結果について

https://www.mext.go.jp/content/20230516-mxt_kyoiku01-00029835_1.pdf

MEXT, (2019). 英語の4技能に関する現状・課題・今後の方向性

https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt_daigakuc02-000003411_6.pdf

